

新型コロナウイルス感染症拡大時の耳鼻咽喉科検診結果

札幌市医師会／札幌市学校医協議会／札幌市耳鼻咽喉科医会学校保健委員会

高木 摂夫、新谷 朋子、佐野 宏行

新型コロナウイルスの感染拡大により、その他の感染症の罹患の仕方にも変化が起こっているとの報告が多い。

耳鼻咽喉科の学校検診では主に耳および鼻咽頭を観察し所見をとるが、その検診結果にも変化がみられるのか、2021年の検診結果の集計値を用いて例年と比較検討した。

2021年は新型コロナウイルス感染症が拡大し、感染対策を講じての検診が行われた年であり、札幌市教育委員会の協力を得て小学校175校、中学校93校の合計33,924名（小学1年生11,208名、小学4年生11,483名、中学1年生11,233名）の生徒の検診結果が得られ、その所見を集計分析することができた。今回この集計結果から検診時に所見があった有所見率について比較検討した。

小学校1年生の有所見率は例年24～25%であるが、2021年の結果は20.4%（男性22.0%、女性19.3%）であった。小学校4年生の有所見率は例年19～20%であるが、2021年は17.2%（男性17.9%、女性16.4%）であった。中学校1年生の有所見率は例年17～18%であるが2021年は17.9%（男性20.5%、女性17.3%）であった。従って小学生の有所見率は例年より低く、中学生ではほぼ同じであった。また男女比は例年通り女子より男子が高い値であった。

所見から推定される疾患（図1）は、これまでと同様に耳垢栓塞、アレルギー性鼻炎が多く、次いで副鼻腔炎、慢性鼻炎、扁桃肥大の順であり、学年が上がるとともに耳垢栓塞が減りアレルギー性鼻炎が増える傾向も同じであった。今回の調査で有所見率に明かな変化があった小学1年生について推定される疾患を個別に比較すると、耳垢栓塞は例年12～13%であるが今回の調査では11.0%（1,187名）とやや減少していた。アレルギー性鼻炎は例年7%前後であるが5.9%（657名）と減少していた。慢性副鼻腔炎は例年4～5%であるが1.8%（198名）と大きく減少していた。慢性鼻炎は例年1.0%前後であるが0.8%（84名）とやや減少していた。扁桃肥大は例年1.4～1.5%であるが1.2%（131名）と減少していた。滲出性中耳炎は例年1.2%前後であるが0.3%（37名）と極端に減少していた。

コロナ禍の日常および学校生活において、手洗い・手指消毒の励行など感染対策が施されるとともにマスク着用により鼻咽頭からのウイルスやアレルゲンの侵入も減っていると思われる。また集団行動が減ったことにより、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐ目的通り感染性疾患の拡大は防がれたものとする。これらによって疾患を引き起こす外的要因の減少と感染の機会が減ったことは学童に大きな影響を与えたはずである。

今回の調査結果で耳鼻咽喉科検診の有所見率に変化が見られたことは、このことを反映している結果と考えられ、特に小学校1年生の結果に差が大きく現れていることは、この年齢の学童においては免疫抵抗力が低く感染性疾患に罹患しやすく、体力的面から外的要因に左右されやすいことを改めて痛感させられた結果であった。

図1 検診所見から推定される疾患分布



